

理解度&釣れる度100%

丸 マルキュー

優良 餌本



エサからパワー



Contents

- 02 Pickup! New item!! 「ヤグラ」
- 04 ウドンセットの浅ダナ釣り
- 08 ウドンセットのチョーチン釣り
- 12 段差の底釣り
- 18 新べら狙い・宙釣り編
- 22 新べら狙い・底釣り編
- 28 野釣り攻略①ドボンの底釣り
- 32 野釣り攻略②乗っ込み期の底釣り
- 34 今更聞けない! パラケエサの違い!!

2023 春冬号

HERA BAIT POWER BOOK

Pickup! New item!!

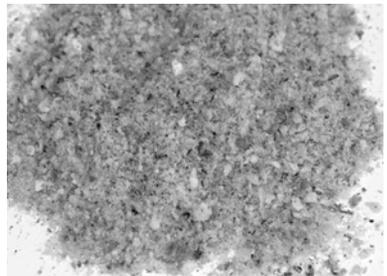
「ヤグラ」

タナを組み立て誘いこむ直下型バラケ

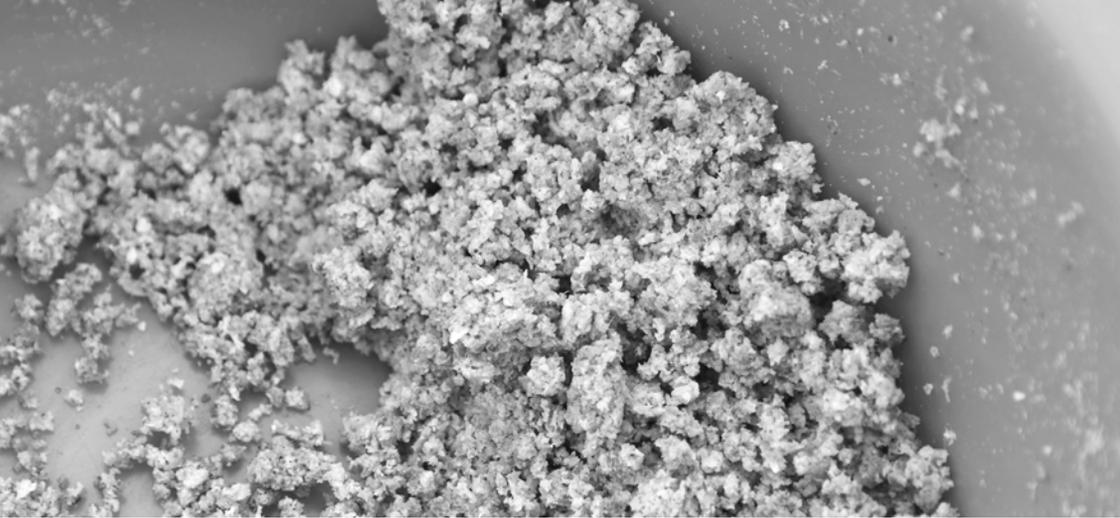


重 さ ■■■■■□
バラケ性 ■■■■■□

狙いのタナまで届く重さと、魚をタナへ呼び込む集魚力とバラケ性が特長のバラケエサ。粗目の素材にも関わらずまとまりがあり、割れ落ちせずしっかりと縦にバラけるため、ウワズリを抑えながら攻撃的な釣りが可能。高活性時の宙釣りや厳寒期の段差の底釣りに最適です。



重くてエサ持ちがいいのが「ヤグラ」の特徴。エサを持たせられるので、非常に使いやすいセット釣り用のバラケエサになっている。



現代バラケエサの最適解 !!

セット釣りを難しいと感じている釣り人は多いだろう。その最たる要因はエサ付けのコントロールではないだろうか。セット釣りはバラケ性の強いエサを使用するので、どうしてもエサがまとまりにくくなる。しかし、このまとまりにくいエサを上手にコントロールして持たせるかがセット釣りの神髄。ただ持てばいいわけではなく、バラけさせながら持たせるところがポイントになる。

そこで登場したのが「ヤグラ」だ。既存のバラケエサのなかでも一番のエサ持ち性能を備えたバラケエサ。エサ付け時の圧加減で持たせ具合のコントロールが容易なので、使いやすさは抜群。もちろんエサが持つだけでなく、重さがあるのでタナへの集魚力にすぐれている。

セット釣りはいかにへら鮎をタナへ呼び込むかが肝心で、エサを持たせやすく、しっかりと重さのある「ヤグラ」の登場はまさに現代セットの最適解といえる。浅タナ、チョーテン、さらには段差の底釣りのペースエサとして幅広く活用できるエサだ。

「段底」、「セット専用バラケ」とどう違う？

重くてバラけると聞いたら、「セット専用バラケ」の特徴を想像される方も多いと思います。確かに「セット専用バラケ」は重くてバラけるエサですが、「ヤグラ」はエサ持ちがよく粒子が粗いという個性を持っています。反対に「セット専用バラケ」は粒子が細かく、バラける速度が速いため、厳寒期や食い渋ったときの抜きセットに適しているといえます。また、エサ持ちの面では「段底」と被るように思えますが、よりタナまでバラけずにエサを持たせることができるのは「段底」です。さらに、粒子が細かくゆっくりと沈むので段差の底釣りでもより食い渋った際は「段底」をブレンドパターンに加えると釣りやすくなります。

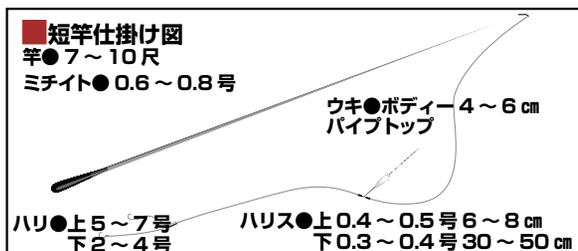
ウドンセットの 浅ダナ釣り

セッティングのポイント

竿の長さは、エサへの反応がそれなりにある時季（晩秋から年内）や空いている状況なら8～10尺の短竿で十分ですが、極端にへら鮎の活性が下がる厳寒期や混雑時では、13～15尺の中尺、場合によっては18尺をだして沖を狙うようになります。

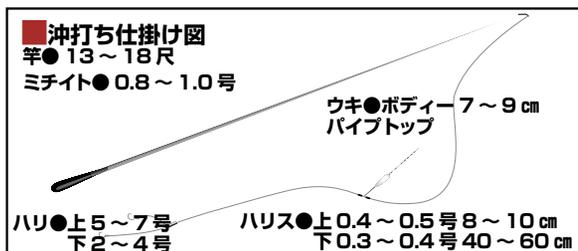
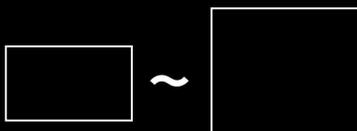
基本は、エサをしっかりナジませてから釣りを組み立てますので、ウキは適度なオモリを背負うパイブトップを使用します。エサ落ちの設定は、バラケエサをしっかり抱えられるようにくわせエサが付いた状態で4～5目盛りだしにします。

そして、魚の反応を探るためにもハリスの長さとかわせのハリサイズの調整が重要になりますので、2～3サイズはくわせ用ハリを用意しておきましょう。



●オモリ 実寸大

0.25mm厚板オモリ 10mm×17mm～17mm×20mm



●オモリ 実寸大

0.25mm厚板オモリ 17mm×20mm～30mm



釣り方のコツ

短竿でも沖打ちでもまずはウキをしっかりナジませるところからスタートします。エサをタナにぶら下げた状態でどう動くかを探っていきます。たとえば、深くナジんだ状態でサワるのか、バラケが抜け始めて少しウキが上がってきた状態でサワるのか、それともバラケが抜けた状態でサワるのか、おおよそこの3パターンからアタリがでる頻度やヒット率が高い動きを見極めていきます。

バラケが付いているときから動くようであれば、それだけエサに反応している活性が高い状態と判断できます。このときは、ハリスは短め、ハリは大きめになります。

そこからバラケが抜け始めて、バラケが抜けてからとウキが動くタイミングが遅くなるほど活性は低くなり、ハリスは長く、ハリは小さくなるのが基本です。

サワリがあるのにアタリがでない、なかなかサワリがでないという場合、エサを小さく付けるか、ギュッと強めにエサを付けてバラケ性を弱めてみましょう。これでへら鮒が近づいてくれるようなら、サワリやアタリがでるようになります。

それでも反応が変わらない場合は、へら鮒がエサに近づいてこない状態と判断してハリスを伸ばしてみます。さらにハリを小さくすることも試みましょう。

それでも動きがよくならないときは、タナを深くする、サオを長くするなどしてこちらから魚に近づくようにします。

こんな手順で釣っていきましょう！

1

ウキをしっかりなじませる

まずは、エサが付いている状態でへら鮒の動きを探るためにもエサはしっかりナジませるところからスタートすること。

2

サワリのでるタイミングを見極める

バラケが付いているときなのか、抜け始めてからなのか、完全に抜けてからなのかを判断。これがその日の釣りのパターンを探る最初の糸口。

3

ハリスワークとハリサイズ

釣り方のパターンが見えてきたら、ハリスの長さやハリサイズを調整。アタリがでるタイミングが早くなったり、ヒット率が上がれば正解に近づいたと判断する。

4

上手く釣れないときは……

バラケエサを小さくするかギュッと圧を掛けてエサ付けし、バラケ性を抑えて反応を確認する。それでもダメなときは、タナを深くするかサオの長さを替えよう。



+



+

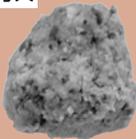


+



●エサの大きさ

実寸大



推奨ハリサイズ=6号

エサが持たない、持たせられないときは、「セット専用バラケ」を「セットアップ」に置き換えてみよう。よりエサ付けが簡単になるので、安心して使えるようになる。



ウドンセットの浅ダナ釣り

●パラケブレンド

「粒戦」50 cc+

「粒戦細粒」50 cc+

水 150 cc+

「ヤグラ」200 cc+

「セット専用バラケ」100 cc

●作り方

「粒戦」50 cc、「粒戦細粒」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 150 ccを注ぐ。ボウルをゆするようにして水が全体にゆきわたるようする。ここでしっかり吸水させるために数分放置する（水温が高い時季は5～7分、厳寒期は10分以上）。ここに「ヤグラ」200 cc、「セット専用バラケ」100 ccを入れ、指を熊手状にしてムラがでないようよくかき混ぜる。

●使い方

できあがったエサの半分ほどを別のボウルに小分けして使う。そのままつまんで丸めてエサ付けする。これでウキにナジミ幅がでるかをチェック。でないようなら少しずつ押し練りをしてエアーを抜き、しっかりナジミがでるよう調整する。

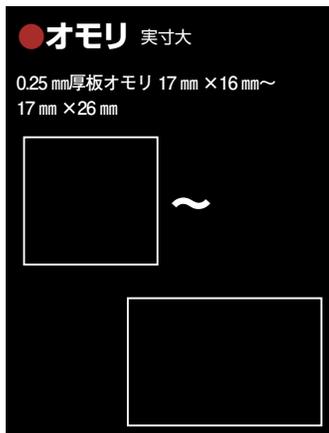
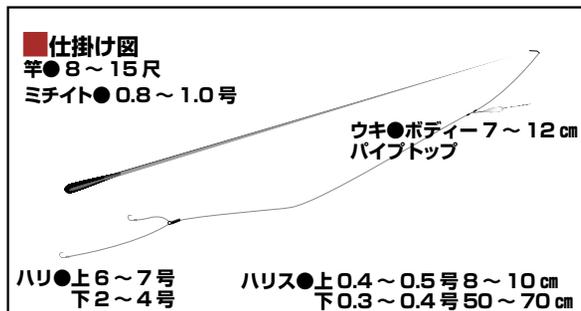
ウドンセットの チョーチン釣り

セッティングのポイント

竿の長さは、水温の高い時季（晩秋から年内、水温10℃以上）は8～10尺の短竿で釣れますが、水温が下がる厳寒期（年始明け以降、8℃以下）になると、極端にへら鮒の活性が下がり、上層に魚が上がってこなくなります。こうなると、12～15尺ぐらいの中尺竿がメインになります。

チョーチン釣りは、狙いのタナへ確実にエサを届けなければなりませんので、ウキは適度なオモリを背負うものを使用します。エサ落ちの設定は、バラケエサをしっかり抱えられるようにくわせエサが付いた状態で5～6目盛りだしにします。

そして、浅ダナ釣りと同様に魚の反応を多く見るためにもハリスの長さとかくわせのハリサイズの調整が重要になりますので、2～3サイズはくわせ用ハリを用意しておきましょう。



釣り方のコツ

竿の長さ（タナ）に関係なく、まずはウキをしっかりとナジませるところからスタートします。浅ダナと同じくエサをタナにぶら下げた状態でどう動くかを探っていきます。しっかりとナジんだ状態でサワリやアタリが強くなる場合は活性の高い状態。確実にタナで釣っていくためにより一層エサをしっかりとナジませることを意識します。空振りが多ければハリスを詰めたり、くわせのハリを大きくしたり、くわせエサを大きくまたは重くしていきます。

渋いときはただナジませるだけでは釣れない場合もあります。このような状況ではロッド操作を多用します。ウキをナジませたところから、竿先を持ち上げるようにしゃくります。しゃくる大きさはウキのトップがすべてでるぐらい。これでバラケが促進されるのでへら鮒を寄せることになります。そして、しゃくってナジんでまたしゃくる。この繰り返しのなかで、アタリがでるタイミングを探ります。2回しゃくってアタるとか、何度かしゃくってバラケが抜けてからアタるなど、その日のヒットパターンを見つけていきましょう。

渋ければ渋いほどアタリのでるタイミングは遅くなります。何度も何度もしゃくらないとアタリがでないときはまさに渋い状況。それに合わせてハリスは長く、ハリは軽くなるのがセオリーです。また、エサ付けをあまくしてバラケを抜けやすくするのも有効です。そしてバラケが抜けた状態で縦誘いを2～3回入れてアタリを誘発させます。これでアタリがでなければ打ち返して、釣りのテンポを速めていきます。

こんな手順で釣っていきよう！

1

ウキをしっかりとナジませる

まずは、エサが付いている状態でサワリやアタリがでるかを見極めていく。この状態で動くようなら活性があると判断できる。

2

しゃくりを駆使する

バラケをぶら下げた状態でウキの動きが悪いときは、竿先を持ち上げるようにしてしゃくりを入れてみる。しゃくりの回数や強弱などを変化させながらその日のヒットパターンを見つけていく。

3

バラケエサをあまく付ける

極端に渋くなったらどっぷりバラケを入れるのではなく、エサが抜けやすいようバラケをあまく付け、バラケが抜けた状態で縦誘いで食わせる。



+



+

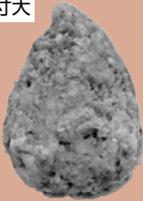


+



●エサの大きさ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

ウドンセットのチョーチン釣り

●パラケブレンド

「粒戦」50 cc+

「粒戦細粒」50 cc+

水 150 cc+

「ヤグラ」300 cc+

「BB フラッシュ」100 cc

●作り方

「粒戦」50 cc、「粒戦細粒」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 150 ccを注ぐ。ボウルをゆするようにして水が全体にゆきわたるようする。ここでしっかり吸水させるために数分放置する（水温が高い時季は5～7分、厳寒期は10分以上）。ここに「ヤグラ」300 cc、「BB フラッシュ」100 ccを入れ、指を熊手状にしてムラがでないようよくかき混ぜる。

●使い方

できあがったエサの半分ほどを別のボウルに小分けして使う。軽く押し練りを加え、それを丸めてエサ付けする。これでウキにナジミ幅がでるかをチェック。でないようならさらに押し練りをしてエアーを抜き、しっかりナジミがでるように調整する。

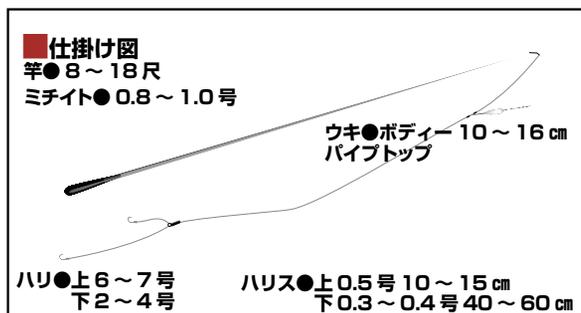
段差の底釣り

セッティングのポイント

段差の底釣りは、深い厳寒期の釣りですので、確実にヒットさせて釣り込んでいきたいところ。できるだけ動きをもらおうと軽いセッティングではなく、しっかりしたセッティングでアタリがでるようにしたいです。

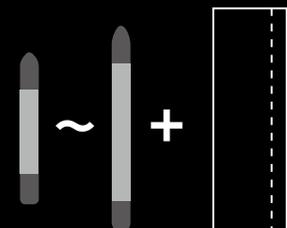
竿は、置き直しなどの操作をしやすいよう、チョーチンで底が取れる長さを選ぶといいでしょう。また、底釣りなので、しっかりタナまでエサが届くように大きめのウキを使います。段差の底釣りは厳寒期の釣りですので、繊細な動きを明確にできる底釣りタイプで細めのパイプトップのウキをオススメします。

ハリスの長さは、魚が小さめの池なら短め（40～50 cm）、大型主体なら長め（50～60 cm）が基準となります。くわせのハリは、ケースバイケースです。軽いハリでないとアタリがでないこともありますし、重いハリのほうがヒット率が高まる場合がありますので、数種類のハリを用意しましょう。



●オモリ 実寸大

「絡み止めスイッチシンカー」0.8g +
0.25 mm厚板オモリ 8 mm × 30 mm ~ 「絡
み止めスイッチシンカー」1.2g + 0.25
mm厚板オモリ 10 mm × 30 mm



釣り方のコツ

前提条件として、エサをナジませるところからスタートします。しっかりナジませてからゆっくりとジワジワウキが上がってくるようにするのが基本です。こうすることで、底近辺のへら鮒を次第に底へ集めるようにします。段差の底釣りでは、エサを打っていくと知らぬ間にウワズってしまうのが釣れない原因。朝は釣れたのに、次第に釣れなくなるのは、このことが大きな要因になります。これを防ぐためにも、まずはバラケエサをしっかりナジませる意識は必要です。

あとはエサの大きさ、タッチでその日の正解を探ります。活性があるようなときは、バラケ性が高く大きなエサ付けでアピール力を高めます。逆に渋いときは、小さくてバラケ性が低いエサで釣っていきます。へら鮒がどうしたらくわせエサに寄ってくれるのかを意識しながら、色々なパターンを試してください。

また、くわせのアピールがアタリの有無に影響します。アピール力の高い『魚信』、極端に渋いときは『力玉』や『感嘆』と使い分けるといいでしょう。

さらにアタリをだすためのテクニックとして“置き直し”を試しましょう。バラケが抜けてくわせだけの状態でアタリがでるのを待ちますが、なかなかアタリがでないときには、竿先でウキを持ち上げるようにしてくわせエサを置き直すのです。これでアタリがでることも多いので活用してください。

こんな手順で釣っていきよう！

1

ウキをしっかりなじませる

底近辺に魚を集めるためにもバラケエサはしっかりナジませたい。魚が寄ると知らぬ間にナジミが浅くなり、ウワズリの要因にもなるので要注意だ。

2

バラケエサの調整

バラケエサの大きさやタッチを探りましょう。活性があるようなときは、バラケ性が高く大きなエサ付けでアピール力を高めます。逆に渋いときは、小さい、バラケ性が低いエサで釣っていきます。

3

“置き直し”を駆使しよう

なかなかアタリがでないときは、“置き直し”を試してみましょう。これも大きくしたり小さくしたりでアタリの有無に影響します。また、何回もしつこくやるのではなく、1～2回でアタリがでなければ打ち返します。



+



+

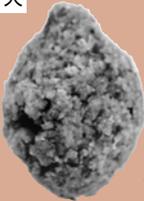


+



●エサの大きさ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

段差の底釣り

●パラケブレンド

「粒戦」50 cc+

「粒戦細粒」50 cc+

水 150 cc+

「ヤグラ」400 cc+

●作り方

「粒戦」50 cc、「粒戦細粒」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 150 ccを注ぐ。ボウルをゆするようにして水が全体にゆきわたるようする。ここでしっかり吸水させるために数分放置する（水温が高い時季は5～7分、厳寒期は10分以上）。ここに「ヤグラ」400 ccを入れ、指を熊手状にしてムラがでないようよくかき混ぜる。

●使い方

できあがったエサの半分ほどを別のボウルに小分けして使う。軽く押し練りを加え、それを丸めてエサ付けする。これでウキにナジミ幅がでるかをチェック。でないようならさらに押し練りをしてエアを抜き、しっかりナジミがでるように調整する。

新べら狙い 宙釣り編

セッティングのポイント

新べらを狙う場合、沖打ちや外向きを釣るので、必然的に竿は長くなります。釣り場の規模にもよりますが、15尺以上、18尺から21尺を使うのが一般的です。空いているときや放流直後で短竿で釣れるときもありますが、8~9尺ではなく12尺ぐらいを使いましょう。これは手前に寄る旧べらを避けるための方法でもあります。

ウキは長竿で沖を狙うので、ある程度の大きさ（オモリを背負う）でないと振り込みがしづらいです。少し大きいぐらいでも問題ありません。

その分、ハリスを長くしましょう。大きなウキで新べらがいる泳層へすばやくオモリを届け、そこから軽いグルテンエサを長めのハリスでゆっくり落とすことで、エサをアピールさせるのです。

また、エサをゆっくり落下させることを助けるためにハリもできれば小さいほうがメリットがあります。ただ、肝心のエサが持たなければ意味がありませんので、エサが持たせられる範囲で小さめと覚えておきましょう。

■仕掛け図
竿●15~21尺
ミチイト●0.8~1.0号



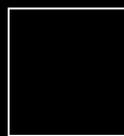
ウキ●ボディー8~12cm
パイブトップ

ハリ●両グルテン=5~6号
●グルテンセット=上6~7号、下4~5号

ハリス●両グルテン=0.4号上40~55cm、50~70cm
●グルテンセット=上0.5号20~30cm
下0.4号50~70cm

●オモリ 実寸大

0.25mm厚板オモリ 17mm×16mm~
17mm×24mm



~



釣り方のコツ

晩秋から年明けまでに行なわれる新べら放流。その新べらを狙って釣るには、いくつかのポイントがあります。まず知らなければならないのが放流情報。いつ新べらが入って、何トン放流されたかです。もちろん、放流日から近ければ近いほうが確率は高いですし、放流量が多いほうがベストです。放流は1回だけではなく、2回、3回と繰り返しますので、その回数も重要になってきます。

次に釣り座の選び方。放流された新べらは沖に着いたり、端にかたまったりします。池の形状にもよりますが、一般的には沖をねらうのがセオリーで、池の手前や奥などが新べらが溜まりやすいポイントです。そこで重要となるのがタナです。打ち始めは2mぐらいをねらってみてください。これでアタリが多いようなら浅くし、アタリが少ないようなら深くします。つまり、新べらのいる泳層を見つけるのが一番です。

エサはグルテンが基本になります。それは新べらが溜まっているエリアを狙うことを前提にしているからです。新べらを寄せるのではなく、溜まっているであろう新べらを食わせるという発想です。そして、より自然に新べらを食わせるためにも軽いグルテンエサが非常に有効です。もし、両グルテンで動きが少ない場合は、へら鮎を寄せるバラケを使うグルテンセットに切り替えましょう。バラケを打つことで、旧べらも混じりますが、新べらも十分釣れます。ウキの動きが悪いときは、両グルテンにこだわらず、セット釣りに切り替えるほうが賢明です。

こんな手順で釣っていきよう！

1

情報を入力しよう

放流日や放流量などの情報を確認する。放流直後に釣行できるのが理想。また、回数を重ねて放流量が多くなればチャンスが増える。

2

ポイント選定

新べらが溜まりそうな釣り座を選びたい。池の手前や奥のエリアで、沖打ちや外向きがセオリー。

3

タナを探ろう

新べらがいる泳層を見つけることが先決。2mぐらいのタナから釣り始めて、アタリが多いようなら浅く、少ないなら深くしてみる。

4

両グルテンが基本だが、セットもあり

新べら狙いの定番エサは両グルテン。軽いグルテンエサを自然落下させて食わせることができるのがメリットだが、ウキの動きが悪いときはバラケを付けよう。



+



+



セットのくわせにも OK!

同じブレンドでセット釣りのくわせエサとしても使えます。くわせとして使う際は、手揉みの回数を増やしてしっかり持つように調整します。

●エサの大きさ

実寸大



推奨ハリサイズ=5号

新べら狙いの両グルテン

●エサブランド

「新べらグルテン」100 cc+
「グルテン四季」100 cc+
水 180 cc

●エサの大きさ

実寸大



推奨ハリサイズ=6号

●作り方

「新べらグルテン」100 cc、「グルテン四季」100 ccをグルテンボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水180 ccを注ぐ。人差し指と中指の2本で全体に水がゆきわたるようよくかき混ぜる。混ざったらボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったら一度ひっくり返してから使い始める。

●使い方

できあがったエサを3分の1ほど小分けして使う。そのままつまみ、指で丸めてエサ付け。できるだけ作ったままのエサを使いたいが、エサが持たないときは押し練りを加える。グルテンエサは乾きやすいので、できるだけ外気に触れないよう気を遣いたい。



+



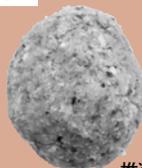
+



※エサが持たせられない、タナが深くてより持たせたいときは、「コウテン」の量を400ccにして硬さで持たせよう。

●エサの大きさ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

新べら狙いのグルテンセット

●パラケブレンド

「グルバラ」200 cc+

水 200 cc+

「コウテン」300 cc+

「バラケマツハ」200 cc

●作り方

「グルバラ」200 ccをボウルに入れ、そこに水 200 ccを注いで混ぜてドロドロの状態にする。そこへ「コウテン」300 cc、「バラケマツハ」200 ccを入れ、指を熊手状にしてよくかき混ぜる。ムラやダマがないように全体が均一になるよう混ぜること。

●使い方

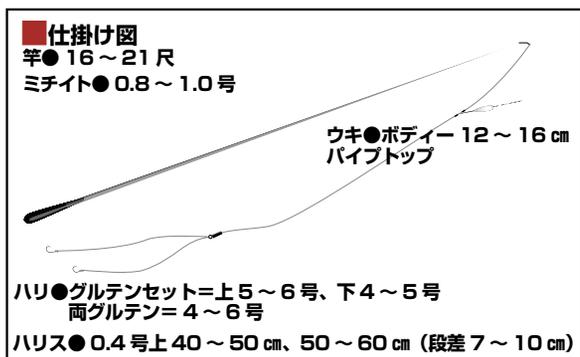
できあがったエサの半分ほど小分けして使う。軽く押し練りを加えてから使い始める。エサを丸めてハリ付けし、ウキがしっかりナジめばOKだが、ナジミが浅かったり、エサが持たないようならさらに押し練りを加えて、しっかりエサが持つようにする。

新べら狙い 底釣り編

セッティングのポイント

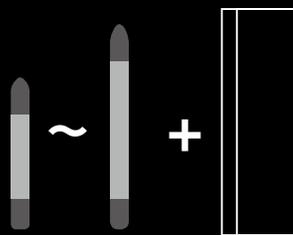
新べらをターゲットにする場合、宙釣りと同様に竿は長くなるが多くなります。それは沖や岸際に居着いているだろう新べらの群れを狙うからです。あとは、いわゆるノーマルの底釣りと同じです。底近くへエサを早く届けるため大きめのウキを使うこと。ウキの動きにメリハリがでるようパイプトップをオススメしますが、極端に太いものは避けたいところです。

動きが少ないときはハリスを長めにしてアピールを高めます。魚が多くウキがよく動くときは短めにしましょう。ハリは5号を基準にし、魚が多くてエサ持ちが悪いなら6号、逆に渋めでアタリ数が少ないなら4号と小さくします。



●オモリ 実寸大

「絡み止めスイッチシンカー」0.8g
+ 0.25mm厚板オモリ 8mm×30mm
～「絡み止めスイッチシンカー」1.2g
+ 0.25mm厚板オモリ 10mm×30mm



釣り方のコツ

放流された新べらは、日に日に寒くなり水温が下がってくるとともに底に着くようになります。宙釣りと同様、ポイント選びは重要です。新べらは沖に着いたり、端にかたまったりします。池の奥や手前、あるいは外向きなど、新べらが溜まる可能性が高い釣り座を選んでください。

底釣りの場合、新べらがいるかいないかがハッキリします。アタリが少ない、旧べらしか釣れないのであれば、場所移動することをオススメします。

釣り方はノーマルのバランスの底釣り。新べら狙いだからといって特別な釣り方をする必要はありません。エサはバラケとグルテンのセットをメインにします。もし、ウキがよく動くようなら両グルテンでもいいでしょう。魚の寄りを保てるセット、食わせる両グルをうまく使い分けるのも一手です。また、両グルテンとグルテンセットのいいところ取りになる“合体エサ”も有効です。使っているダンゴとグルテンを合体させることで、寄せ効果と食わせを両立したエサ。これが大ハマリすることもよくあります。

どのエサを使うにしてもナジミ幅をキープすることを心がけてください。底釣りの大敵であるウワズリを抑制するためにもこのナジミ幅のキープは重要です。

また、新べら特有のムズツとした小さいアタリや抑えるような動きも食っている確率が高いので、そういった動きにも積極的に手をだしていきます。

あとはハリスワークの調整です。動きが少ないときは長め、動きすぎるときは短めにします。ハリスを替えるときは億劫がらずにタナを測り直しましょう。

こんな手順で釣っていきよう！

1

ポイント選定

新べらが溜まりそうな釣り座を選びたい。池の手前や奥のエリアで、沖打ちや外向きを狙うのがセオリー。

2

まずはセットで様子を見る

新べら狙いだから両グルテンではなく、バラケを使うセット釣りで状況を見極めよう。魚が多いようなら両グルテンにスイッチする。

3

いいところ取りの“合体エサ”も試したい

ダンゴエサとグルテンエサを合体させる“合体エサ”の実績も高い。簡単に作れ、使い方も難しくないで、ぜひ試してもらいたい。



+

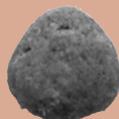


+



●エサの大きさ

実寸大



推奨ハリサイズ=5号

新べら狙いの底釣り

●バラケブレンド

「ダンゴの底釣り夏」100 cc+
「ダンゴの底釣り冬」100 cc+
「バラケマツハ」100 cc+
水 140 cc

●作り方

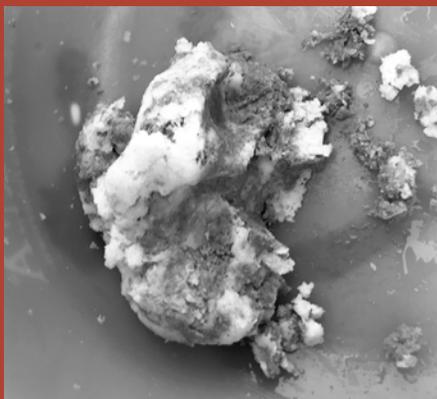
「ダンゴの底釣り夏」100 cc、「ダンゴの底釣り冬」100 cc、「バラケマツハ」100 ccをボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水140 ccを注ぐ。水が全体にゆきわたるようよくかき混ぜる。ボウルの隅に寄せ、しばらく放置してエサが締まってきたら出来上がり。

●使い方

できあがったエサを3分の1ほど小分けして使う。軽く押し練りをして丸めてエサ付け。エサが持たないようならさらに押し練りを加え、確実にエサが持つまで調整。サワリがでたら手水と押し練りでアタリがでるタッチを探っていく。

●“合体エサ”

ダンゴエサとグルテンエサを合体させる“合体エサ”は実績のあるエサ使いです。ダンゴエサによる寄せ効果とグルテンエサの食わせる能力がうまく融合したいいとこ取りのエサです。作ったグルテンエサとダンゴエサを合体させるだけなので実に簡単。セット、両グル、“合体エサ”と色々試しながら反応のいいエサを見つけてください。



●作り方

出来上がったグルテンエサとダンゴエサをひと握りずつ、ほぼ同量で取り出す。グルテンエサにダンゴエサを混ぜるように押し込んでいく。均一に混ぜ合わせるのではなく、写真のような斑状（マール状態）でOK。

●使い方

出来上がったエサをそのままつまんで丸めてエサ付け。魚の寄りが少ない、ウキの動きが弱いときはダンゴ部分が多い箇所、魚がいるけどアタリにならない、カラツンがでるようなときは、グルテンが多い部分を選んでエサ付けする。

ダンゴエサとグルテンエサを合体させる“合体エサ”。均一に混ぜるのではなく、斑状（マール状態）にするのがコツ。

●エサの大きさ

実寸大



推奨ハリサイズ=5号

新べら狙いの底釣り

●くわせブランド

「凄グル」50 cc+
水 50 cc



●エサの大きさ

実寸大



推奨ハリサイズ=5号

●作り方

「凄グル」50 ccをグルテンボウルに入れ、そこに水50 ccを注ぐ。人差し指と中指の2本で全体に水がゆきわたるようよくかき混ぜる。混ざったらボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったら一度ひっくり返してから使い始める。

●使い方

できあがったエサを3分の1ほど小分けして使う。そのままつまみ、指で丸めてエサ付け。できるだけ作ったままのエサを使いたいですが、エサが持たないときは押し練りを加える。サワリがあっても食いアタリにつながらないときは、手水で軽く押し練りし、エサを軟らかくして反応をみる。

野釣り攻略① ドボンの底釣り

セッティングのポイント

竿の長さは魚の通るラインに合わせるのが理想ですが、ドボンの場合、極端にウキの位置が穂先に近いと釣りづらい。水深の倍以上の長さを目安とするよいでしょう。

オモリは着脱がしやすい外通しがおすすめで、ウキがしっかり沈没する重さを選ぶようにします。流れがなかったり弱いときは軽め、強いときは重めにします。目安としてはウキがゆっくり沈んでいくのではなく、ストーンと沈むくらいの重さにするとよいでしょう。

仕掛けは全体的に強めが安心です。ミチイト、ハリスも太め、ハリもしっかりしたもの（太軸）を使います。



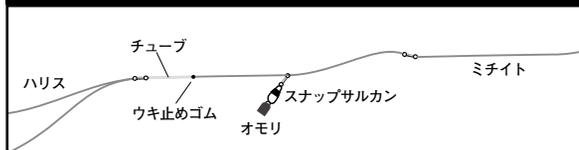
ハリスオモリ (バランスの底釣り)



エサや仕掛けが流れないようにする工夫としてハリスオモリという方法もあります。ガン玉をハリスに付けて止める方法で、ガン玉を下ハリスの上バリがくる位置にセットするのが一般的です。流れが緩い場合は、ハリスオモリで十分止まり、バランスの底釣りに近いので、ウキが動きやすいメリットがあります。

●オモリ 1～2号

オモリの大きさは単純にオモリが流されない大きさ。
「ギリギリまで軽くする」など神経質にならなくてもよい。



釣り方のコツ

ドボン釣りとは、外通しまたは中通しオモリを用いてオモリベタ（オモリを底に着ける）で釣る釣り方です。野釣りで多用する釣り方で、オモリベタにすることで流れのある川や魚影の少ない釣り場などでエサを止めてじっくり狙うことができます。また、風が強くて振り込みが難しいときにも有効です。

釣り方のポイントは、まずタナ設定。オモリが底に着いた状態でウキのトップ先端が3目盛りでる位置にウキを合わせます。このとき、しっかり振り切った状態で設定してください。ドボンの釣りは基本、振り切りです。仕掛けをしっかりと張ることで、オモリベタでもアタリがでやすくなるのです。

流れの強弱でシモって（水圧によりトップが潜って）しまうこともあります。そんな場合はトップ付け根近くまで水面上にだし、あとは竿を手前へ引いたり前へ出したりしながら調整します。

アタリは消し込みや食い上げが多くですが、それ以外にも1目盛りぐらい小さくモゾモゾしたり、トップ全体が震えるようなアタリもありますので、怪しいなと思ったらアワせてみてください。

また「アワセ切れ」に要注意。仕掛けがピーンと張った状態の釣りなので、強くアワせてしまうとハリス切れを起こしやすいです。ドボン釣りでは消し込みなど大きなアタリがでるので、つつい強いアワセをしてしまいますが、強いアタリのときほどアワセはソフトにしましょう。

エサは寄せと食わせが両立するグルテンセットが一般的ですが、ときに両ダンゴを打ってみたり、両グルテンにしたりと変化をつけて反応をだすのも効果的です。

こんな手順で釣っていきよう！

- 1 しっかり振り切りで！**
動きの伝達をよくするためにも仕掛けをしっかりと張った状態で釣りたい。回し振りやタスキ振りでいいのでしっかり振り切ろう。
- 2 ロッドワークでシモリ対策**
流れがある場合はその強弱でシモるので、トップ付け根近くまで水面上にだし、あとは竿を手前へ引いたり前へ出したりしながら調整しよう。
- 3 エサはグルテンセットが基本だが……**
エサは寄せと食わせが両立するグルテンセットが一般的ですが、ときに両ダンゴを打ってみたり、両グルテンにしたりと変化をつけるのも効果的。

●くわせブランド

「野釣りグルテンダントツ」 1 分包+水量標準～硬め



+



●エサの大きさ

実寸大



推奨ハリサイズ=6号

●作り方

「野釣りグルテンダントツ」はスティックの袋に小分けにされています。スティック1袋分をグルテンボウルに入れたら、袋に書いてある水量を入れます。流れがない釣り場であれば標準水量、流れがある釣り場では硬めにします。水を入れたら30回ほど怖がらず勢いよくかき混ぜます。3～5分放置してできあがり。

●使い方

できあがったエサの半分ほどを別のボウルに小分けして使う。軽く押し練りや揉み込んでエサが持つように調整。

野釣り攻略① ドボンの底釣り

●パラケブレンド

「ダンゴの底釣り芯華」100 cc+
水 50 cc

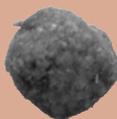


+



●エサの大きさ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

●作り方

「芯華」100 ccをエサボウルに入れて水50 ccを注ぎ、全体が均一になるまでよく混ぜる。しばらく放置して十分に吸水したらボウルの隅に寄せておく。

●使い方

できあがったエサの半分ほどを別のボウルに小分けして使う。エサが確実に持つように押し練りを加えて使い始める。持ちが悪いようならさらに押し練りやエサを揉み込んでつかう。

野釣り攻略②

乗っ込み期の底釣り

●エサブランド

「野釣りグルテンダントツ」

1 分包+水量標準



●作り方

「野釣りグルテンダントツ」はスティックの袋に小分けにされています。スティック1袋分をグルテンボウルに入れたら、袋に書いてある水量を入れます。水を入れたら30回ほど怖がらず勢いよくかき混ぜます。少し固まりだしたらボウルの隅に寄せ、3～5分放置してできあがり。これをひっくり返して使う。

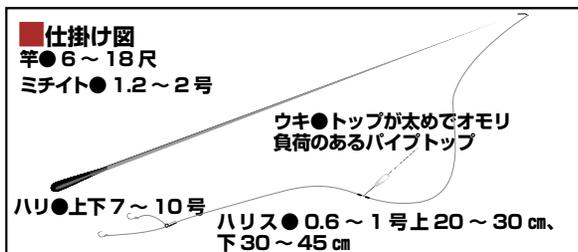
●使い方

できあがったエサの半分ほどを別のボウルに小分けして使う。軽く押し練りや揉み込んでエサが持つように調整。

セッティングのポイント

竿の長さはへら鮒の回遊に合わせます。足元まで魚がくるようであれば短め、モジリなどが沖で見られるようなら長めとなります。比較的浅場の釣りになりますので、食い走りを止めるためにも強めの竿を選びましょう。当然、それに合わせてミチイト・ハリスは太め、ハリも太軸で大きめになります。

ウキは水深が浅い場合でも、大型のアオリに負けないオモリ負荷のあるものを使います。ただ大きいと釣りにくいので、小さくて太めのタイプ、トップも少し太いものがオススメです。沖を狙う場合もオモリ負荷のある大きめで、トップも見やすいよう太めがいいでしょう。



釣り方のコツ

乗っ込みとは、春先から産卵のためにへら鮒が浅場へ突っかけてくる行為のことです。この産卵期に大型を狙って釣るのが乗っ込みの釣りです。乗っ込みと聞けば、岸際の浅場を短竿でねらう接近戦をイメージするかもしれませんが、中尺を出して浅場へ回遊してきた群れを狙う釣りもあります。50cmを越えるような超大型だけでなく、40cmクラスでもでっぴりとしたこの時季らしい魚が釣れるので、ぜひ春になったら野釣り場へ足を運んでもらいたいものです。

釣り方は底釣り。エサは回遊してきたへら鮒を狙うので両グルテンが基本です。バラケエサを打って寄せようとはせず（バラケエサを打つと、コイが増えたり、ジャミがうるさくなる）、グルテンエサを打ち続けて魚が回ってくるのを待つイメージです。

まずは、とにかくエサを打ち続け、サワリなり何かしらウキに反応がでるまでがまんです。ウキが動きだしたら、数を釣る釣りではありませんので、明確なアタリを狙って確実に釣っていくといいでしょう。

また、エサを打ち続けることでエサの打ちすぎでアタリがでにくくなることもあります。ときには休憩を挟んで（床休め）みるのもあります。再開後の1～2投目で目が覚めるようなアタリがでることも多いものです。

タナは基本的に上バリトントン～数cmはわせたところでのバランスですが、ベタ気味にしたり、切り気味、あるいは完全に底から切ったりするなど、色々探ってみましょう。アタリがしやすい、ヒットしやすいところが正解となります。

今更聞けない！ バラケエサの違い！！

日頃からセット釣りのバラケエサを作り慣れていない方は、数あるバラケエサの使い分けについて“難しい”“よくわからない”と思われる方も多いでしょう。そのひとつの要因に、セット釣り用のエサの種類が多いことが考えられます。それぞれの製品の特徴を上手く利用できれば、状況に合わせたエサ合わせができますが、個々の製品の特徴がよく分からないというのが正直なところでしょう。

今年はバラケエサの新製品「ヤグラ」が発売されたこともあり、ここでもう一度セット釣りに使用するのバラケエサの種類と特徴をおさらいしましょう。

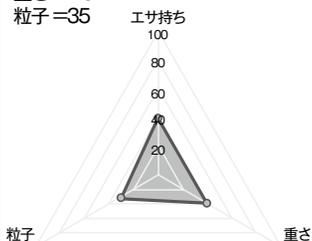
左のグラフは「へら鮎天国サイト」内にある「へらエサブレンド計算ツール」を使用して検索した各製品の単品使用スペックを表したものです。「エサ持ち」、「重さ」、「粒子」を数値化することで、エサ単品の性質が分かりやすくなっています。

たとえば、セット釣りで必ずといっていいほど使用する「粒戦」は、重くて粗い粒子でエサは持たないことが分かります。当然、エサを持たせる要素をブレンドしたいと考えます。そこで何をブレンドしたらよいかと考えれば、セット釣り用エサのなかで一番エサが持つ「ヤグラ」がいいでしょう。さらに、これだと粒子が粗いので、「粒戦細粒」、「とろスイミー」、「セット専用バラケ」、「バラケマツハ」などの細かい粒子のものをブレンドします。このように必要な要素を合わせてるのがエサブレンドです。

ある程度活性があるときは粒子が粗い、エサが軽いほうがアピール力が高まりますのでへら鮎の反応を得やすくなります。逆に粒子が細かく、エサが重いとへら鮎をタナに凝縮しやすくなりますが、活性が下がると、粗い麩がへら鮎を遠ざけることもありますし、重いエサではへら鮎を反応させることができなくなることもあります。ですから、エサ単品の特徴を知ることが重要で、それを調べる際や、自分のブレンドパターンを見直したい方は是非「へらエサブレンド計算ツール」活用してみてください。

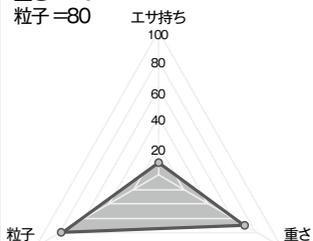
「バラケマッハ」

エサ持ち= 40
重さ= 40
粒子=35



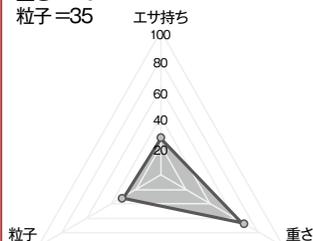
「サナギパワー」

エサ持ち= 10
重さ= 75
粒子=80



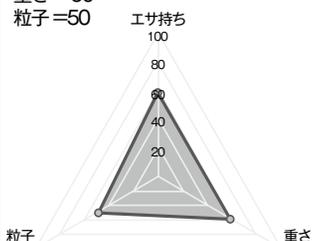
「セット専用バラケ」

エサ持ち= 25
重さ= 70
粒子=35



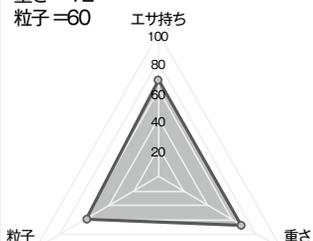
「セットアップ」

エサ持ち= 60
重さ= 60
粒子=50



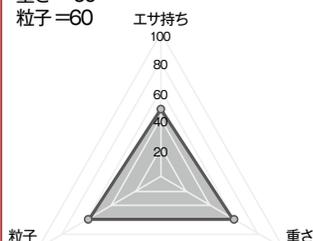
「ヤグラ」

エサ持ち= 70
重さ= 72
粒子=60



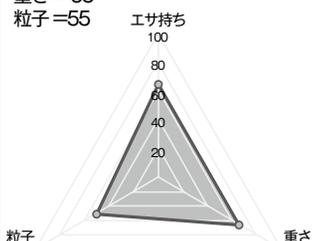
「セットガン」

エサ持ち= 50
重さ= 60
粒子=60



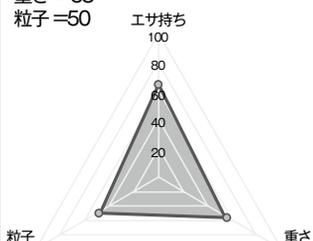
「段底」

エサ持ち= 65
重さ= 65
粒子=55



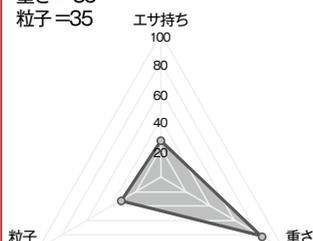
「パウダーベイトスーパーセット」

エサ持ち= 65
重さ= 58
粒子=50



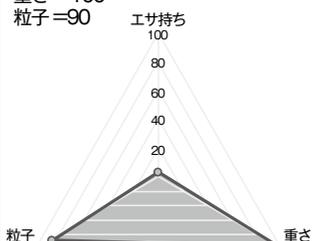
「とろスイミー」

エサ持ち= 25
重さ= 85
粒子=35



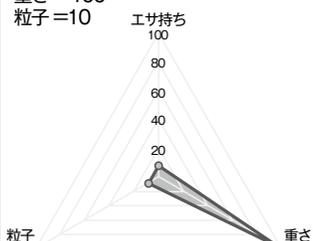
「粒戦」

エサ持ち= 5
重さ= 100
粒子=90



「粒戦超細粒」

エサ持ち= 10
重さ= 100
粒子=10



へらエサブレンド
計算ツールはこちら↓



すべての粒子が、 下へ、下へ。

つれるエサづくり一筋
丸マルキュー

狙いのタナまで送り込みやすい重さを備え、
魚をタナへ呼び込む集魚力とバラケ性を
高いレベルで発揮するバラケエサ。

粗目の素材を多く含んで
いながらもよくまとまり、
タナではエサ玉の外側から
次々と剥がれ落ちるように
真下へ向かって拡散。

舞い上がったり
漂ったりする粒子が極めて少なく、
ウワズリを抑え込みながら
攻撃的な釣りが展開できます。

●ヤグラ 350g(チャック袋)

新発売



Twitter、
Facebookで情報配信中!

丸マルキュー株式会社

〒363-8509 埼玉県桶川市赤堀2-4 TEL.048-728-0909
ホームページアドレス <https://www.marukyu.com/>

2022.11.M.17000